

特別寄稿

# 日本ポップス界の巨星

# 大瀧詠一 (昭和42年卒) を偲んで



大瀧詠一さん。撮影されたのは、現在の青葉ビルにあった旧市民病院の屋上。どこかにはかんだような懐かしい。制帽を目深に被っているのは、自転車で転倒に怪我をしたため。その自転車は、レコード代を捻出す代を浮かせようと、通学用に佐々木さんから借りたものだという。写真提供:大瀧静子さん



写真上は、寄稿者が館長を務める「鉄の歴史館」で開催された「大瀧詠一回顧展」で撮影したもの(平成26年3月)。これらのCDは、大瀧氏から佐々木館長に贈られたものも含め、佐々木館長の所蔵品である。

平成25(2013)年12月30日、日本ポップス界の巨星、大瀧詠一氏(本名:大瀧榮一、昭和42年卒)が急逝しました。一般的には「風立ちぬ」(松田聖子)、「熱き心」(小林旭)、「夢で逢えたら」(シリア・ポール)などの作曲者として、あるいは自身で歌った「幸せな結末」のヒットで知られる大瀧詠一その人が本校の卒業生であるとは、長らく知る人ぞ知ることでした。近年では、釜石市の「釜石ふるさと応援大使」に就任し、特に東日本大震災以降は釜石に想いを寄せるとともに、今回の本校創立百周年に当たっても何らかのかたちで関わりたいと意欲を見せていたそうです。それだけに、その死は非常に残念でなりません。ここでは高校時代からの盟友・佐々木諭(昭和42年卒)が大瀧氏との思い出を語り、偉

大瀧詠一さん(左)と「鉄の歴史館」館長 佐々木諭さん(右)